

# 連研通信

十勝組研修部

2010/2/13

が、節目に、ひとりで関わっていったように思います。お寺とは別に、すぐそこにあって、いつでも行って、

二〇〇九(平成二十一年)年十二月十二日、第八期の、十勝組・門徒推進員養成連続

研修会(連研)の第八回研修が本願寺・帯広別院を会場にして開催されました。

全道的な大雪の影響を受け、参加者はいつもより大はばに少なく、八カ寺から二十二人でした。テーマは「神と私」。難しいテーマで、悩まれた方が多かったのではないのでしょうか。(僧侶にとっても、なかなか難しいテーマです。)

次回も、ともに考え、ともに悩み、ともに学んで参りましょう。(石) ※ひとこと感想を紹介します。

「今日は神、神社との関わりについての法座でしたが、自分の現在までの関わりを考えてみると、仏さまと並列で信仰しているわけではない



2009年4月1日、本願寺の御動座(御影堂←阿弥陀堂)

お願いやお守りをしてもらえるという場所になっている。これからも神、仏に関わっていくことになる、弱い人間であると確信した」

話し合い法座で良い話が聞けました。生きる力になった教えでした」「大雪のため出席者が少なかったことが残念でした」

参加できなかった方が多かったため、講師の「まとめ」の感想を、いつもより多めに掲載します。

第八回のテーマは「神と私」を中心にして「あなた(私)にとって神社や神棚はどういうもの?」という提起の中で進めました。私たちにとっては大変大事なテーマでありましたが、残念ながら大雪の中で参加者が少なかったもので、いずれかの機会にもう一度みなさんとともに確認・話し合いをしたいと思っています。

当日は具体的に「①あなた(あなたの家)が神に参る(神事に関わる)ときと仏に参る(仏事に関わる)ときの心情は変わりますか。」「②あなたやあなたの地域にとって神社や神棚とおつきあいはどういいうものですか。」という投げかけをしました。

この話し合い法座は、神と仏を対比させどころかの優劣を求めるものではありません。また、神を通して真宗の教え・念仏に生きる者として、自分自身の矛盾点に向き合い、私自身のあり方に向き合うことを大事にしています。さらには「神棚」を降ろすことをめざすものではありません。しかし、そのままでもいいという、今の私のあり方、神棚との関わり方における現状を肯定するものでもありません。

それではなぜ、この問いが立てられてきたの

でしょう。この問いの中から あきらかになつてくるものは、今の私のあり方・姿が、「教え・念仏」によって問われているということ。それはある意味とても厳しくあきらかにしたくないことかもしれません。

「難しいから」「昔から」「皆がしてるから」「お付き合いだから」と「神」（に限りませんが）というテーマについて考えることをしてこなかった私たち、考えることをやめさせてきた僧侶・教団の姿があります。この事実から出発するならば、まずは僧侶自身がご門徒に対してあやまらなければなりません。さらに、深く考えていこうとする中で、自分にとって都合なことを排除していってしまおうとする私自身の姿もあきらかになってきます。

また、「仕方ないことだから」といつてあきらめていくことは、知らぬ間に他者を排除していることになるかもしれません。それは自分が排除されないために排除する側に立つということにもなります。そのような私の姿、自らのありようがあきらかになることで、そのことに戸惑いオロオロする姿を抱えて生きているのではないのでしょうか。

「神」を拝むこと、神棚を祀ることは「ずっと昔から」と思われていますが、実は明治四年に制度化された「国民総氏子制度」からで、せいぜい一〇〇年ほどのものです。日本国民は一人残らず神道の氏子とされ、神社参拝や各家庭への神棚の設置が強制され、また伊勢神宮の大祓（お札）の拝受などが義務づけられ、それに反する者は「非国民」として地域社会から排除され、国家から要注意人物として弾圧を受けてきた歴史があります。

もちろん、この制度は戦後になって廃止されていますが、今現在に至るまで習慣として残り続けてきたものに縛られ続けられている姿が今の私たちだと言えます。残念なことにこの氏子制度の元になったものは江戸時代にあった「寺檀制度」（幕府がキリシタン禁制を徹底させるために、全ての民をどこかの仏教寺院の檀家として登録させ、その管理を仏教寺院・僧侶が担ってきた）であり、この縛られた形から私たち自身も解き放たれているとは言い難いものがあります。

つまり「神」のテーマを問うということは、私の姿と向き合うことに他なりません。

仏（仏教・仏壇） 〓 感謝（ありがたい）、神（神道・神棚） 〓 祈願（お願い）と両方を求めてきた私の姿は、大きな視点（阿弥陀さまの世界）からみるならば、気がつかないまま周りと自分を縛りつけていく（支配していこうとする）姿とも言えましょう。「制度」がなくなったにもかかわらず、考えようといしなまま意識として残り続け「生きる力にならない教え」に生きてしまったありようがあります。

現実にかけているさまざま「事実・現実」に目を向けていくことのできない私たち自身が現にここにいます。しかし、この「縛られていく関係（神）」から解き放たれ（気づかされ）ていくという世界そのものが、真実の教え・念仏にであっていくことだと思います。私自身がこの縛られている事実に気づいた（気づかさされた）ならば、そうではない姿に変わっていきたくいと願う一人となりたいたいものです。縛って（縛られて）きた世界を、わずかであってもあらためていこうとする姿に「教えにであう」という世界が開かれていきます。このテーマをずっと抱え続けながら生きていく人生自体に大きな意味があります。

【脇谷】